

横浜市立 左近山特別支援学校 学校評価報告書 (令和元～3年度)

重点取組分野	令和元年度		総括	重点取組分野	令和2年度		総括	重点取組分野	令和3年度		総括
	具体的取組	自己評価結果			具体的取組	自己評価結果			具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	①個別の教育支援計画と個別の指導計画について、学級・学年・並びに学校全体で指導の内容や目標を確認し将来を見通した計画となっているか共有する。②各教科、自立活動の授業において、子ども同士の関わり合い大切しながら主体的に問題解決していく力の育成について研究する。③ICT機器の活用により、意志表出手段を身に付け、自己表現力や自尊感情を高める。	①個別の教育支援計画や個別の指導計画について、組織的に情報共有を行い、ケース会や学級会で指導内容や目標について話し合うことができた。②複数の学級、学年の子ども同士での関わりを意識した授業実践を行った。③各教科の学習や学級の振り活動などで、タブレットやビクマックなどのICT機器を活用した学習場面を多く設定し、成果を上げた。	B	生きてはたらく知	①個別の教育支援計画と個別の指導計画について、児童生徒の実態把握に基づき、学級・学年・並びに学校全体で指導の内容や目標が、将来を見通した計画となっているかを確認し共有する。②各教科、自立活動の授業において、児童生徒同士の関わり合いを大切にするが、主体的に問題解決していく力の育成について研究する。③ICT機器を活用した学習を設定し、児童生徒が意思表出手段を身に付け、自己表現力や自尊感情を高める。	①子どもの実態について情報共有や指導計画等の読み合わせを行う中で、現在の様子や将来の姿について共通理解を図ることができた。②感染症対策のため、直接的な関わり合いは少なかったが、友だちの学習の様子や成果を共有することで主体的な問題解決力を高めることができた。③ICT機器を活用することで、児童生徒が自分から友だちとコミュニケーションをとったり、役割を果たしたりする経験を積み重ねられるよう支援した。	B	生きてはたらく知			
豊かな心	①できることを増やす体験を通し、自尊感情や自己有用感を育む取組を推進する。②地域とふれあう活動を大切にするとともに、地域の人のつながりや地域の社会資源を活用した学習を展開する。	①委員会や係活動などで、個々の課題に応じた体験の機会を設け、自己有用感を育む取組を進められた。②地域のショッピングセンターの利用やさくらやまSKYフェスタなどで、地域の人々と触れ合った。地域の公園や郵便ポスト等を活用した授業を展開した。	B	豊かな心	①学校生活全体を通じて、できることを増やす体験をし、自尊感情や自己有用感を育む取組を推進する。②左近山地域や居住地域とふれあう学習活動を大切にするとともに、地域の人のつながりや地域の社会資源を活用した学習を展開する。	①様々な学習や個に応じた役割を行う係活動に継続的に取り組むことで、児童生徒の達成感や自己有用感を高めることができた。②近隣の小中学校とビデオレターやZoom等で交流を図ったり、近隣の公園での校外学習や地域のお店の買い物学習を行ったりとすることで、地域の社会資源を活用した学習を行うことができた。	B	豊かな心			
健やかな体	①肢体不自由児の身体や感覚等について全職員で共有し、学校生活全体を通じて子どもの状態や発達段階に応じた対応を行う。②担任・栄養教諭・養護教諭・看護師・保護者が連携し、アレルギー等に対し、必要に応じて「食育」や「体の健康」等の授業を行うことで、自分の身体や健康について意識を高める。	①医療的ケア基本研修や摂食研修を通じて基本的な対応方法について理解を深めた。今後も、個々の摂食や医療的ケアが安全に実施できるよう、研鑽を続けていく。②はくばくたよりを通じて児童生徒が食に興味を持ち、自分の身体や健康について考える機会を設けた。	B	健やかな体	①肢体不自由児の身体や感覚等について全職員で共有し、学校生活全体を通じて児童生徒の状態や発達段階に応じた取組を行う。②担任・栄養教諭・養護教諭・看護師・保護者が連携し、必要に応じて「食育」や「体の健康」等の授業を行いながら、自分の身体や健康(アレルギー等)について意識を高める。	①PT研修などを通じて、児童生徒の障害に対する共通理解を深めることで、日々の指導において児童の状態に応じた適切な対応ができた。②栄養教諭と連携して、給食ができる過程を学習したり、調理に関わる人々に感謝を伝えたりする学習に取り組んだ。	B	健やかな体			
センター的機能の取組	①特別支援教育コーディネーターを中心に、ライフスタイルや進路に関する具体的な相談の充実を図るとともに、地域や副学級校交流の小中学校の子どもたちへ障害児者理解・人権教育の推進に関する出前授業等の取組を行う。	①特別支援教育コーディネーターが、地域の小中学校児童生徒に障害児者理解・人権教育の出前授業を実施した。また、地域の小学校個別支援学級からの相談に応じ、支援方法等について助言を行った。	B	センター的機能の取組	①特別支援教育コーディネーターを中心に、ライフスタイルや進路に関する具体的な相談の充実を図る。②特別支援教育コーディネーターを中心に、小中高等学校の児童生徒(副学級校交流を含む)や教職員に、障害児者理解・人権教育の推進に関する講習や出前授業等の取組を行う。	①基幹相談支援センターや医療的ケア児者コーディネーターなどとケースカンファレンスを行うなど外部機関と連携した。②左近山小学校で出前授業を行った。児童生徒への対応や車いす使用の避難の方法など依頼があった学校へ訪問し、支援した。	B	センター的機能の取組			
自分づくり教育(キャリア教育)	①卒業後の姿が具体的に描けるよう、保護者への進路に関する研修会をそのニーズに応じた形で実施する。②職場見学先や現場実習先の拡大を目指す。進路専任を中心に開拓を行うとともに、一人ひとりの特性や希望を見極め、保護者と進路決定に向け連携した取組を実施する。	①卒業後の姿が具体的に描けるように、外部機関と連携を図り、外部講師による研修を実施した。②横浜市を中心とした生活介護事業所・就労移行支援事業所などの福祉事業所や企業など広範囲に渡って開拓を行い、進路決定に向けた校内実習などを行うことができた。	B	自分づくり教育(キャリア教育)	①本人・保護者が卒業後の姿を具体的に描けるよう、ニーズに応じた形で進路に関する研修会を実施した。②職場見学先や現場実習先の拡大を目指す。進路専任を中心に開拓を行うとともに、一人ひとりの特性や希望を見極め、本人・保護者と進路決定に向けて連携した取組を実施する。	①様々なニーズに応じられるように、いろいろな立場の方を外部講師として招き、進路に関する研修会を実施することができた。②様々な進路先の開拓に努めるとともに、進路面談や実習などを行い、進路決定に向けた取り組みを行うことができた。	B	自分づくり教育(キャリア教育)			
地域連携	①地域行事に対して学校が協力できる形で、保護者や教職員が参加できるようにする。②地域の方々と連携し、学校ボランティアとして参画してもらうことができるようにする。③学校関係者評価に参画する方々と学校関係者評価の意義について共有し、評価に向け取組を実施する。	①地域の防災訓練や学区の地域活動ホームの行事に教職員がボランティアとして参加した。②地域のケアプラザ等にポスターを貼り、ボランティアを募集し、現在6名の登録があった。③学校づくり懇話会では、本校の課題等について、地域や保護者の方々からご意見をいただき、次年度に向けての方向性を確認できた。	B	地域連携	①地域の行事等への教職員の参加について、学校として協力できる方法を確認し進めていく。②左近山地域の方々と連携し、学校ボランティアへの参画と育成を進めている。③学校の現状について、学校づくり懇話会に参画する方々と共有し、評価と改善に向けた取組を実施する。	①感染症対策により、地域行事が中止となったため、参加することができなかった。②実際の活動ができなかったが、ボランティアの方へ学校よりを送付してつながりを続けるようにした。③学校に集まった学校づくり懇話会ではできなかったが学校評価委員会検討したことを郵送し地域の方と共有した。	B	地域連携			
安全管理	①防災や防犯研修や緊急時のシミュレーション等を通じて、教職員の意識を高め安全な学校づくりをする。②医療的ケアに教員が看護師と協働して取り組むとともに、ヒヤリハット事例を蓄積・分析し対策を立て、安全で安心できる医療的ケアを実施する。	①避難訓練や緊急時を想定したシミュレーションを通して、緊急時の対応手順を理解・共有できただけでなく、今後の課題についても確認することができた。②ヒヤリハット事例を蓄積・分析し、全職員で確認を行い、再発防止に努めた。	B	安全管理	①防災や防犯研修や緊急時のシミュレーション等を通じて、教職員の意識を高め課題を解消して安全な学校づくりをする。②ヒヤリハット事例を蓄積・分析し対策を立て、安全で安心できる医療的ケアを実施する。③人工呼吸器使用児童の安全で安心できる学校生活の在り方について、特別支援教育課との連携を密にして研究を進める。	①防犯研修では、地域の警察署と連携した実践的な訓練を通して、教職員の防犯に対する意識が高められた。また、全クラスで緊急シミュレーションを行い、緊急時の手順や動きを共有し、今後の課題についても確認できた。②ヒヤリハット事例を蓄積・分析し、全職員で共有し、再発防止に努めた。③校内人工呼吸器対応検討委員会を設置し、呼吸器に関する様々な情報共有と対応策について検討した。	B	安全管理			
通学支援	①医療的ケアが必要な児童生徒や通学に長時間かかる児童生徒の登下校支援のモデル校として、福祉車両の業者及び特別支援教育課との連携を密にし、安全で安心できる通学支援を行っている。	①登下校支援のモデル校として、スクールバスだけでなく、医療的ケア専用の福祉車両や福祉タクシーなどを運行する上での様々な課題の蓄積ができた。次年度に向けて課題を分析し、より一層、安心安全な通学支援が行っていくよう努めていきたい。	B	通学支援	①登下校支援のモデル校として、福祉車両の業者及び特別支援教育課との連携を密にし、1年間で蓄積された課題を分析して解消に努め、さらに安全で安心できる通学支援体制を構築していく。	①福祉車両事業者と情報交換を密にし、課題解決をすることができた。GPS機器の取り扱いや、緊急時の連絡、保護者との連絡体制などで課題があるので修正を図っていく。課題解決に際して、適宜、特別教育支援課に報告相談し、情報共有を図りながら進めることができた。	B	通学支援			
いじめへの対応	①子ども達同士が一緒に育つために、安心して参加できる授業・自尊感情を高める授業を研究する。②学校の教職員が、子ども達や保護者に対して、まずは受容的な対応を心がけるよう、必要に応じ人権教育に関する研修を実施する。③いじめについては、常に情報共有を図り、組織として対応する。	①各クラス、グループで、年齢や障害等が異なる児童生徒同士がともに学び合い認め合うことができる授業を研究した。人権研修を実施し、教職員の人権意識を高めることができた。②いじめについては、毎月末に聞き取りを実施し、早期発見に努めた。	B	いじめへの対応	①児童生徒同士が一緒に育つために、安心して参加できる授業や自尊感情を高める授業について、引き続き取り組む。②教職員には、児童生徒や保護者に対して、受容的な対応を心がけるよう、必要に応じ人権教育に関する研修を実施する。③いじめについては、常に情報共有を図り、組織として対応する。	①校内人権研修を通して、自尊感情を高める授業実践について研究した。②人権啓発研修での情報を全体共有し、教職員の人権意識を高めた。③月に1度委員会を開催し、解決策などを全体周知することで、深刻化する前にいじめを防ぐことができた。児童生徒への聞き取り調査や、本人だけでなく教員もスクールカウンセラーの助言を受けることで、児童生徒一人ひとりに寄り添った対応をすることができた。	B	いじめへの対応			
人材育成・組織運営(働き方改革)	①校内研修の計画的な実施により、障害特性に即した指導・危機管理に対応する能力等、教職員の力量の向上を目指す。②リーダーシップ開発研修対象教諭が企画・運営するメンターチームが中心となり、初任や臨任などの経験の浅い教諭の人材育成を充実させる③校内組織の有機的な活用と研修を実施することにより、関係機関との連携の取り方等について全教員が共有することで主体的な働き方につなげる。	①開校初年度かつ経験の浅い教員が多い現状から、学校運営の確認としての研修が主になり、専門性の高い研究・研修については多くはできなかった。②様々な研修を実施し、教職員の指導力、危機管理能力等の向上の努めることができた。メンターチームを形成し、経験の浅い教諭の支援に当たった。	B	人材育成・組織運営(働き方改革)	①校内研修の計画的な実施により、障害特性を考慮した指導や危機管理能力等、教職員の力量を向上させる。②リーダーシップ開発研修対象教諭が企画・運営するメンターチームが中心となり、初任や経験の浅い教員の人材育成を充実させる。③校内組織の業務内容を理解し、分業間での有機的な協働の回り方を共有することで、主体的な働き方につなげる。	①計画的に研修を進められた。しかし、研修内容を、児童生徒の実態把握や日々の授業改善へつなげていくことが、今後の課題である。②メンターチームが企画運営を行った「授業者支援会議」により、初任者や2年目の研究授業後の振り返りが充実し、効果的な人材育成が行われた。③各代表者会や企画運営会が十分に機能しなかった。各組織の業務内容の理解や共同のために、組織自体や情報共有の方法を見直す必要がある。	B	人材育成・組織運営(働き方改革)			
学校関係者評価	地域:来年度以降、特別支援学校との交流を本格的に進めていくため、連合自治会主催の夏祭りを本校グラウンドで開催できるよう検討していきたい。左近山ショッピングセンターなどにも子どもたちを連れてきてほしい。保護者:先生と保護者の評価内容が違ふのは、先生の改善したいという思いがあることなので、期待したい。近隣小中学校:音楽的な集いや生徒会役員の訪問など、特別支援学校との交流が実施されたが、来年度以降は、交流の質を高めたい。さらに連携を強化していきたい。			学校関係者評価	新型コロナウイルス感染拡大に伴い、「学校づくり懇話会」を開催できなかったため、学校の現状や学校評価アンケートの集計結果及び考察等を書面でお伝えした。		学校関係者評価				
評価結果に対する学校の見解	学校評価の結果から、保護者への効果的な発信方法検討、教職員の専門性の向上、子どもの主体性を育むための地域協働の在り方などの課題が明確になった。それらを踏まえ、子どもたちの主体的な学習を目指し、その取り組み内容について、いろいろな機会に発信していくようにしたり、学校全体で経験の浅い教職員を育てる取組を行いながら、特別支援学校としての専門性を高める研修に取り組んだりしていきたい。また、地域協働については、コミュニティハウスとの連携や地域行事への参加を検討していく。			評価結果に対する学校の見解	学校関係者には、学校の現状や学校評価アンケートの集計結果及び考察等を書面でお伝えしたが、フィードバック(学校関係者評価)を得られていない。		評価結果に対する学校の見解				
中期取組目標振り返り	今年度から来年度にかけて、教育課程編成作業を行っている。本校の児童生徒の実態を踏まえ、育てたい力について考え、どのように特色ある教育活動を行うか、について話し合っているところである。その取り組みについて、保護者や地域の方々にお知らせし、ご意見をうかがうことにより、改善し、よりよい教育活動をおこないたいと考えている。また、来年度、1月に公開授業研究会の開催を予定しているため、それに向けて、教師のチーム力を高め、子どもの可能性、主体性を引き出す授業実践を積み重ねていけるよう、研究を深めていきたい。			中期取組目標振り返り	医療的ケアや人工呼吸器対応を担当のクラスを中心に行ってきたが、それぞれのケースについて、全体共有する場を設けられなかった。今後は、教職員全体で情報を共有することで、児童生徒の安心安全につなげていきたい。コロナ禍で地域協働についての取組が不十分であったため、感染状況に応じて、コミュニティハウスおよび地域の小中高等学校、企業・関係機関との交流授業を進めていきたい。今年度、「教師のチーム力を高め、子どもの可能性、主体性を引き出す授業実践」を主題として、研究を進めたが、研究初年度でまだまだ課題も多い状況である。来年度も全教職員で育成すべき資質・能力について共通理解を図りながら、児童生徒の可能性、主体性を引き出す授業実践に取り組んでいきたい。		中期取組目標振り返り				